



幸手・教師のススメ10か条(外国語指導編)

—子供たちの学びの姿を見取り、確かな力を育成する—

① 外国語を「分かる」、「得意」、「好き」にさせよう

大切なことは、「分からない」、「苦手」、「嫌い」をつくらない。裏返せば、「分かる」、「得意」、「好き」をつくる。

② 子供の主体性を重視した、「気付き」を促す授業展開をしよう

実生活と結びつけ、目的・場面・状況などを明確にした課題設定にする。

③ 子供の実態把握を十二分に行おう

何ができるのか。何を学んでいるのか。子供たちの武器（使える言語材料等の実態）を教師がつかんでおく。

④ 子供の自己肯定感を高めよう

まずは発言を受け止めて、「いいね」。失敗した子供にも、「いいチャレンジだね」。

⑤ 子供が変容・成長する授業をしよう

子供が変容・成長しない活動・授業は意味がない。確実な見届けと肯定的な声掛けがキモ。

⑥ 「モデル提示＝本時の目指す姿の具現化」を意識しよう

デモンストレーションによるモデル提示は本時の目指す姿。あやふやにせず、しっかりと提示。

⑦ 最後は一人でできるようにするために学習形態を工夫しよう

最終的には、必要な活動を一人でできるように。みんなで「何となくできた」で終わりにしない。

⑧ 練習だけで終わらせないようにしよう

パターンプラクティス≠言語活動。言語活動＝英語を使用し考えや気持ちを伝え合う活動。

⑨ 指導と評価の一体化、小・中の連携強化を図ろう

信頼性・妥当性・実用性のあるテストに。評価方法については、常に見直しを図る。

⑩ 家庭学習(宿題)の出し方を工夫しよう

習得はもちろん、活用、発展等の課題を提供し、授業との好循環を図る。

幸手・教師のススメ10か条（外国語指導編）



①

外国語を「分かる」、「得意」、「好き」にさせよう

- 外国語教育の目標 コミュニケーションを図る資質・能力（素地・基礎）の育成
- 大切なことは、「苦手」、「嫌い」をつくらない。裏返せば、「得意」「好き」をつくる。
- 特に、小学校段階では、英語の有用性よりは、「英語は楽しいから」で学習させたい。

②

子供の主体性を重視した、「気付き」を促す授業展開をしよう

- 日常生活や学校行事など、実生活と結びつけた課題設定を。
- 教師の発問や説明は吟味する。（教師が話し過ぎないこと）
- 相手意識をもたせ、コミュニケーションを行う目的、場面、状況などを明確に設定する。
- 子供が「何のためにやっているのか分からない」と感じる無味乾燥な活動はさせない。

③

子供の実態把握を十二分に行おう

- 何が出来る／できない、何を学んでいる／いないのか、子供たちの学習に使用できる武器（言語材料）は何か。表現に使用する言語材料をしっかりと整理する。
- クラスルーム・イングリッシュは大いに使う。（教室を言語活動の場とする。）
ただし、何でもオールイングリッシュがよいわけではない。（文法事項の説明、活動の説明など、子供の実態に合わせる。）
- ペラペラ早口でしゃべるのがよいわけでもない。（特に、小学校はマザーズ・トークくらいでもよい。）



④

子供の自己肯定感を高めよう

- 子供が発言したら、まずは、発言を受け止めて、「いいね」
- 失敗した子供にも、「いいチャレンジだね」
- 間違いの指摘・修正はさりげなく、可能な限り最小限にする。

⑤

子供が変容・成長する授業をしよう

- 活動、授業、単元の最初と最後（Before・After）で、子供たちがどう変容・成長したかが重要。
- 子供が変容・成長しない活動・授業は意味がない。
- 確実な見届けを行い、変容・成長を把握する。
（例）10分間の活動を行う場合
前半5分・・・子供の活動の見届け（よい点・改善点）
中間指導・・・よいモデルを知らせ、全体に広める。あるいは、改善点を伝える。
後半5分・・・中間指導後の生徒の変容・成長の見届け
活動後・・・子供の変容・成長やよかった点をほめ、次の活動につなげる。

⑥

「モデル提示＝本時の目指す姿の具現化」を意識しよう

- モデルはしっかりと提示する。ここがあやふやだと、子供の活動もあやふやになる。
- オーセンティックな内容がよい。（担任の自己開示、ALTの活用等）

⑦

最後は一人で行えるようにするために学習形態を工夫しよう

- 身に付けさせるべきことは、きちんと全員に確実に身に付けさせる。
- 最終的には、必要な活動を一人で行えるようにさせる。
- グループ（みんな）で「何となくできた」で終わりにしない。

⑧

練習だけで終わらせないようにしよう

- 練習や理解する時間 ←→ 言語活動を行ったり来たりできるように。
- 言語活動＝実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う活動（パターンプラクティスは言語活動ではない。）
- 練習は十分に行うが、練習だけで終わらないこと。

⑨

指導と評価の一体化、小・中の連携強化を図ろう

- テスト等のポイントは3つ
①信頼性（測定すべきものをいつも一貫して測定しているか）
②妥当性（測定すべき力を測定できているか）
③実用性（作成、実施、採点、解釈等が効率的に行えるか）
- 評価方法については、常に見直しを図り、信頼性や妥当性を高めるよう努める。
（この方法で、測るべき力が本当に測れるか。子供の活動に対する、この評価結果は妥当かなど）
- 小・中の連携強化を図るため、系統性を意識した指導を行う。



⑩

家庭学習（宿題）の出し方を工夫しよう

- 授業準備・復習（基礎基本の定着）として
前時の復習・次時の予習→授業→前時の復習・次時の予習→といったサイクルを確立することが必要。①授業に必要な準備（単語の意味調べなど）、②授業で学習した内容をノートにまとめさせるなど、家庭でも英語を学習する機会を意図的に設定する。（単語の練習は、授業や言語活動で頻度の高いものに限定する。）
- プロジェクト型として
一定の期間を与え、子供が主体的に考えて取り組ませる課題を与える。
（例）1か月以内に、「英語で道案内」の動画をペアで作成し、動画をとって、オクリンクで提出する。（評価に加える。）

こんなことしていませんか？ ～やってしまいがちな指導からの脱却～

- 子供に発音練習をさせるとき、教師と一緒に発音する。→ 教師は子供の発音を聞き、評価し、フィードバックする。必要な指導を加えたらうで繰り返し、変容させる。
- やり取りや発表の際に、子供がプリントに書いてある文字を見ながら行う。→ 自己表現ではなく、「単なる音読」になる。文字から目を離させる。
- 子供たちに「分かった？」などと聞く。→ 教師が自分を納得させるために使う言葉。子供が「分かる授業」を心がける。
- グループ活動で、Aさんはこれ、Bさんはこれ、Cさんはこれを調べて、最後に3つを合体して、それぞれが発表する。→ グループで活動しても、全体で共有し、最後は個に返す。学習内容が保証されない。
- 授業前の予習として、ノートに教科書の本文を書き写させる。→ 内容や音声分からない文章を書き写すのは苦痛であり、学習効果も低い。授業後のまとめとして、学習した内容をまとめさせる。
- 単語練習について、全員一律に、すべての単語を10回ずつ練習させる。→ 今後必要となる単語は確実に書けるようにすることが重要。書けるものは1回でもよいが、書けないものは書けるまで。（小テスト等で確認）
※英語嫌いにもつながりやすいので、練習のさせ方は要注意。 ※特に、中学校では、書かせる単語を精選する。今後や将来の学習を見通し、「書けるレベルまで高める必要がある単語」、「見て意味が分かればよい単語」を生徒に示す。

